



第81巻 第4号
 年4回発行
 社会福祉法人 慈生会
 〒165-0022
 東京都中野区江古田3-15-2
 TEL 03-3387-5567
<http://www.jiseikai.jp>
 振替口座 ベクニアの家
 00170-6-15317

東星学園の児童との関わり方

大矢 正則

東星学園では、『教育内容こそ最大の募集戦略である』をキーワードに掲げ、カトリック学校としての教育の刷新を目的として、今年四月に、教育刷新委員会を立ち上げた。

今回の教育刷新委員会は、「学園全体の教育について(福音宣教)」、「教科教育、進路指導の充実について」、「学級経営」などの五つの分科会に分け、各分科会は数名の委員によって構成された。分科会の任務は、各テーマに関して校長が提示した諮問を受け、それに対して答申することであった。各分科会とも、今年四月から七月にわたって審議を進めた。校長は各分科会に対して答申を出すにあたり、全教職員の意見を幅広く聞くよう要請した。

カトリック学校において刷新は常に必要である。一方で、報道で頻繁に取り上げられているように教職員の多忙感は大い。そのため、刷新は効率よく、無駄に時間をかけるこ

となく実施することが求められる。

そこで、各分科会には、スピード感を求めた。そして、各教職員はその求めに応じ、期限としていた七月末を待たずに、ほとんどの分科会が校長の諮問に対する答申を出した。

その後、八月には各分科会代表者からなる『全体総括チーム』による報告会を経て、校長は答申を吟味し、施策を決定し、八月の教職員全体研修会において、それを発表した。

さて、ここまで技術的な話に終始してきた。なぜならこの刷新は、「学園内刷新」であり、内容は(ある意味で)企業秘密だからである。しかしながら、『瑠璃草』に執筆するにあたり、今回の刷新委員会の中の「学園全体の教育について(福音宣教)担当チーム(以下、福音宣教チームと略記する)で審議され、また、それを受けて校長が決定した施策に関して、公開する方が、まさに福音宣教になるので、後半の紙面を割いて報告したい。

校長は各分科会に対していくつ

の諮問事項に答申するよう求めた。ただし、なんの前提もなく答申を求めたわけではなく、諮問の前提を文書化した。福音宣教チームに対する前提文は以下である。

『カトリック学校は教会における重要な「福音宣教」の場であるから、本学園では、すべての教育活動の根底に「福音的価値観」を置く。福音的価値観とは、人間は例外なく神様から愛されているということ。言い換えれば、人間は神様から愛されるほど価値があるということ。(中略)それは、「あなたはあなただからすばらしい」ということ。これは、すべての人間が同じということではない。もし、人間に共通点があるとするならば、それはすべての人が神様から愛されているということのみ。

他の点においては、あらゆる点で個々は異なる。つまり、ユニークな存在として神様から創られている。だからこそ、一人ひとりかけがえのない存在である。この世に存在するもので意味のないものは何一つなく、生を受けた者で固有の使命がない者は誰一人いない。それほど一人ひとり

は貴重な存在。それは存在として貴重なのである。すなわち、行為によってその尊さがあるのではない。ここに、BeingがDoingに優先することの根拠がある。東星学園は、児童生徒の、DoingよりもBeingを振り所

として教育する場である。』
 この前提に立って、いくつかが諮問したのであるが、一番大切な諮問は次の事項である。それは、「児童生徒一人ひとりが自分の存在そのもの(Being)がかけがえのないものであるということを中心から感じる事ができるようになるためには、具体的に全教職員がどのような姿勢で児童生徒と関わればよいか」という最も基本的な事柄である。

それに対しての答申は、プロセスであるので、掲載は控えるが、それをもとに、東星学園では、いくつかが掲載することとした。その全部を掲載する紙面はないが、要旨を掲載し、この稿を閉じたい。

「児童生徒一人ひとりが自分の存在そのもの(Being)がかけがえのないものであるということを中心から感じる事ができるようになるために東星学園の全教職員は以下の姿勢で園児児童生徒(以下、児童と略記)と関わる。①児童の尊厳を最大限尊重し、それを傷つけることのないような関係性を保つ。②児童を尊敬し、感謝する。③常に穏やかな姿勢で児童に接する。④児童の自尊心を高めるような関りを維持する。⑤以上を実現するために、教職員同士も互いに尊敬しあい、尊厳を傷つけないことのないよう行動する。」
 (東星学園小・中・高等学校 校長)

修道会設立認可八十五周年

特別講演をいただく

神様のはかりしれない慈しみの中で、二〇二二年六月二十四日イエスのみ心の祝日に、修道会設立認可八十五周年を迎えました。

当日、森一弘司様による特別講演をいただき、神の憐みの心を再確認し、フロジャク神父様の生涯に具現化されていることを確かめ、今、何が求められているかを考えました。また、八十周年からの五年間を振り返り、「今」ベタニアのカリスマをどう生きるかを主題に各自が手記の形で分かち合った記念誌も配布されました。

「どんなことであれ、困っている人がひとりでもあれば、その問題解決のために手をかさなければならぬ。遠い将来の完璧な解決よりも今が大事なのだ」という創立者の意志をあらためて思い起こしながら歩み続けたいと思います。



(ベタニア修道女会)

永年勤続三十年表彰

素晴らしい方々に恵まれて

菊地 清樹

約三十年前、旧光星学園(現マ・メゾン光星)を訪れた時、出迎えてくれた利用者の方々と出会った瞬間に迷わず入職を決断しました。当時、ベタニアバザーでの売り上げが百万円を超えていた時代、日々黙々と働く利用者と職員の姿から刺激を受け、自分にも何かできないかと心が燃え上がり、和紙作りやトラクター操作など色々なものにチャレンジしました。いつしか、フランス料理フルコースを目標に利用者と共に必死になって鶏の仕事に奮闘し、願いが叶ってホテルエピナルにて皆で食べた味は忘れられません。不老若神父様は「那須には大きな夢がある」という言葉を残されました。マ・メゾン光星の日常の中にも夢がいっぱい詰まっている事を実感できた瞬間が数えきれない程ありました。詰まっているという事は沢山のやりがいになります。そして愛に満ち溢れた職場で長年に渡り仕事をさせて頂けたことに心から感謝致します。先人たちが引き継いできた大切な思いを施設や地域支援の中で生かしていきたいように頑張っていきたいと思っています。

(相談支援事業所ノエル 管理者)

シンボルツリー

遠藤 充子

「シンボルツリー」とは家族を守る存在であり、「記念樹」である場合が多い。マ・メゾン光星では、十九年前、建物を建てる時に植えたシンボルツリーは「シャラの木」と言う「夏椿」だった。椿に似た白い花が、一日しか持たず、見事な位置潔くぱらりと落ちた。花言葉は「はかない美しさ」何故か、サムライを連想させた。事務所前のラウンジの中央で大きく育っていた。しかしコククリートに囲まれた花壇で根が育たず、次第に腐り、木の真ん中の枝が枯れ、切り落とすことになった。次のシンボルツリーはどんなのが良いか考える中で、結局、「オリーブの木」に決まった。常緑樹で大きくなり過ぎない、乾燥や冬の寒さに強い、樹形が美しいなど、良い面がたくさんあるが、一番の決め手は「オリーブ」の記述が聖書には五十六回も出てくる事である。カトリック施設にはふさわしい樹木であると思われる。

最低気温がマイナス十二℃までなら耐えられるという事を知り、那須の気温でもギリギリ大丈夫と判断した。もちろん冬は木の葉を敷き詰めて保温しなければならぬ。今年の五月初めに植え替えた。一メートルちょっとの木だが枝振りが良く沢山の葉っぱが付いている。六月には

小さな花も咲かせた。いずれ、徳田教会の「ゲッセマネの園」にあるオリーブの木の様に大きく豊かに育つことを願っている。



ノアの箱舟の場面で水が引いたかを確かめる為に、ノアはハトを飛ばした。すぐにハトは帰ってきて、その口にはオリーブの葉がくわえられて、ノアは洪水が収まった事を知る。この場面はとも有名だ。おりしも、戦争が起きている今、「オリーブ」は「平和」「安心」の象徴としても相応しい気がする。今現在「オリーブ」の木は赤の立ちベコニアや、紫サルビア、ヘレニュームの黄色などの鮮やかな草花の真ん中に君臨してすくすくと育っている。

※余談になりますが、聖マリア修道院に「ノアの箱舟」と題した花壇があるのをご存じですか。那須町名産の芦野石でかたどった庭です。ガイディングボランティアグループ「風花会」の作品です。四季折々に様々な花が咲き誇っている。マ・メゾン光星にお越しの際、是非覗きませんか。*

(マ・メゾン光星 施設長)

『相談支援型フードパントリー』に参加して

森 乃里子

保育園の子ども達は、食事をしてお腹を満たし、心を満たすことを毎日繰り返しながら成長しています。子ども達にとって苦手な食べ物との出会いもあり、それもまた成長の第一歩と捉えて、一つひとつの苦手な食べ物克服に向かう姿を温かく見守っている保育士の姿があります。

こんな幸せな毎日の食事風景ですが、区内でも食糧支援を必要とされている方々がいらっしやると知り、二〇一八年より「フードドライブ」(中野区社会福祉法人等連絡会・協働事業プロジェクト)に保護者と職員の協力で参加を開始しました。家庭で余剰となった食品を子ども食堂等の必要な施設にお渡ししたり、食料品を無料配布する企画では、食品集めと会場運営に参加してきました。

この活動は二〇二一年より『フードパントリー』と名称を改め、コロナ禍でも継続的な地域支援の取り組みとなりました。この活動により地域の実状をみながら、自分たちが出来ることを見つけていき、社会に関わっていただける手応えを感じ、他のこともやってみようと挑む気持ちが生まれていたところ『相談支援型フードパントリー』のお話を頂きました。

この事業は、高齢・障害・児童分

野の事業所が連携し、コロナ禍における生活困窮支援等に取り組み、地域の身近な相談窓口としての拠点作りを目指すものです。中野区内では十施設が参加し「北部すこやか福祉センター」地域では東京コロニー・東京令和館そして当園が拠点です。

この新しい支援は、決まった会場と決められた時間に食品を受け取るのではなく、食にお困りの方の相談を受けて、個別に対応します。その際、食以外の生活・就労・子育て相談等、相談者の背景に合わせて考える、細やかな取り組みです。お住いの近くで、都合の良い時間に食品を受け取れる利点もあります。お預かりしている大きな不織布の「パントリーバッグ」の中には、パックご飯・カップ麺・レトルトカレー等、火を使わずにお腹を満たせる食品が入っています。賞味期限に注意し、食品を入れ替えます。



まだ始まったばかりの取り組みですが、お腹も心も満たせるような関わりが、保育園でも出来たらと思っています。

(徳田保育園 園長)

女子バレー部の活動

島本 萌々子

ベトレーム学園バレー部は、①バレーボールを通してみんなで楽しい時間を過ごし、チームワークや協調性を養う②挨拶や礼儀を身に付けることを目的として活動しています。

現在は、小学3年生から中学2年生までの計9名の女子児童で構成しており、毎週水曜日に近くの小学校を借りて、バレーの練習をしています。中学生の中には中学校の部活でもバレー部に入っている児童もいます。

今年の夏こそは児童養護施設バレーボール大会に出て、上手になったことを自分たちでも実感できる良い機会だと思っていました。ですが、残念ながら、コロナ禍で児童養護施設バレーボール大会は無くなってしまいました。練習場所も制限されてしまった。練習回数も減ってしまいました。



少ない練習の中でも児童全員が一つ一つの練習を大切にして頑張っていました。そのため、今年の夏には集中練習と職員や園内バレー部のOGに参加してもらい練習試合を実施しました。

実施に当たって、日中の体育館はとても暑く、保冷剤や水、スポーツドリンク、塩分チャージも大量にと、熱中症対策を十分に行いました。かなり暑い中でバレーではありましたが、いつもより長い時間で思い切りバレーができることを楽しんでいました。練習試合では、いつもとは違う市民体育館という大きい場所、児童にとっても嬉しい様子でのびのびと今までの練習の成果を発揮できました。

来年はマスクを外して思い切り練習ができて、児童養護施設バレーボール大会で十分に成果を発揮できることを楽しみに、これからも技術向上に向けて頑張っていきたいと思っています。(ベトレーム学園 ホーム担当職員)





SDGs〔七番〕の目標「エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」地球や人の体にやさしいエネルギーをみんなで使おうーを今回はご紹介したいと思います。

そのために家庭で職場で学校で出来ることを考え、実行することが求められています。地球に生まれ、生き、生かされている「全ての生き物」と共に、未来の子供たちのため、また現在の私達が「誰一人として取り残されない」世界にしなければ、と言う切なる願いの一つの目標です。

私の住む聖ヨゼフ修道院は栃木県那須町の那須高原にあります。平成二十三年三月十一日の東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故は自分事として起こりました。

ですからエネルギー問題への関心は大きいのです。私達の取り組みは、持続可能な易しいものです。電気使用

量を少しでも減らすため、**【a】朝、昼**夕に欠かせないお湯は電気ポットで沸かすのでなく、薬缶でお湯を沸かし、保温ジャーに移し替える。**【b】**パン焼きはオーブントースターからシンプルのトースターに。**【c】**月に二回はガスで土鍋ご飯にする。以上の三点を今迄の取り組みに加えしました。私達の全ての取り組みはチマチマした(小さいことを積み上げていく)ものです。それでも、限りあるエネルギーをみんなに分ち合いたい思いがあるからです。

このところ「原発再稼働」認可のニュースが流れます。喉もと過ぎれば・・・という事なのでしょうが、どなたかの言葉を借りれば「それにして物忘れが、ひどすぎる！」と思うのは私達共同体五人だけでしょいか。加えて「使用済み核燃料」が残ってしまう原子力発電はクリーンとは言い難い、と思うのですが・・・。

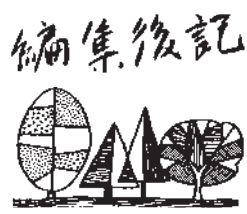
それはさておき現在、私達の共同体はチマチマしたことを高い意識を持って続けています。未来の子供たち、「かつて昔の大人達は、地球の存続の崖っぷちに立って、こんなチマチマしたことを真剣になってしていたのね」と、私達の世代がしてきた自然破壊の様々な愚かしさを歴史から学んで欲しい、と切に願っています。

(記・Sr北村)

計 報

シスタートーマス 吉野 良子

一九三四年 六月二三日 歴 生
一九七七年 二月十一日 立 誓 願
二〇二二年 七月二十五日 帰 天
ベタニア修道女会

七月十九日、利用者の方三名が発熱、コロナ陽性に、それから十日間足らずで、利用者の半数四十名の方がコロナ陽性になってしまいました。その間、職員二十名が陽性になり、残された職員だけで、業務をこなすという、これまでに経験したことのない夏を過ごしました。

一ヶ月足らずで収束できたのも、職員の頑張りや協力があってからこそ、職員みんなに感謝です。

八月三十日、夏休みもあと数日という時期にベトレム学園では平和と感謝のミサとお楽しみ会を行った。お楽しみ会は、これまでファイヤー祭という行事で、まだグラウンドがあ

(中村 英男)

る時にはそこでキャンプファイヤーを囲んで行っていた。この夏の楽しかった思い出を共有し、これから始まる新学期に向けて頑張っていること、最後の夏の行事として、締めくくる事ができた。

(関 広宣)

新型コロナウイルスに感染し、療養中の自宅からの編集後記となりました。幸い症状も軽いのですが、自宅療養していると、いかに自分が家族に支えられているのかを実感いたします。

食事、洗い物に洗濯、全て支えて貰わずに生活できません。家庭でさえこうなのですから、この療養期間中、職場の皆さんが私の業務をいかに支え、助けてくださっているかを思うと感謝で一杯になります。この体験を糧にして、職場の皆さんの元に戻ろうと思えます。

(杉山 智和)

マスクをしながら酷暑をしのいできた今夏、「最高気温四十度」と聞いても驚かなくなりました。感覚があります。その地球を冷やすために上空二十キロの成層圏に超微粒子をまき、人工的に雲を作るとか、大気中からCO2回収・除去するなど、気候を操作する技術開発の話に耳にしました。真に人間にふさわしい社会の発展につながるものなのか？海や土地、いのちあるすべてのものをますます汚染するだけではないのか？ 第二の核利用のようなことに頼らず、皆が気づいたことをコツコツ続ける方が人間にふさわしい解決方法だと思っております。

(Sr中野 利恵)